

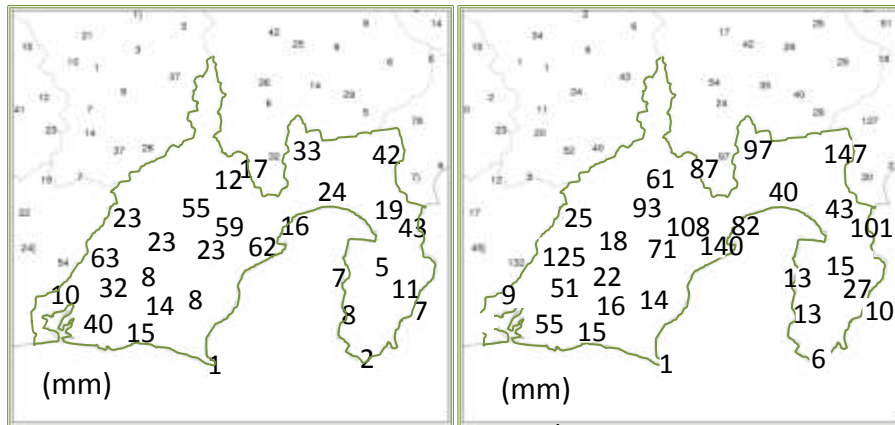
1994年 7月17日～19日 不安定(上空寒気と気圧の谷、日本の南海上に台風) 静岡県気象災害小史 事例 No17

1. 気象経過

18日9時には、日本海に高気圧があって東海から近畿地方は晴れて気温が上がっていた。また、関東地方には、この高気圧の縁辺から北東の風が吹いていた。一方、千島近海には低気圧があって、寒冷前線が関東沖までのびていた。このため関東甲信地方は曇が多く、気温が上がらなかった。これにより、東海地方と関東甲信地方では気温差が大きい状況となっていた。特に静岡県では、山岳との気温差が大きくなり、気象レーダーにあるような局地的な前線が形成された。夕方頃より、東海沿岸部には、台風などに起因する暖かく湿った南風が吹き始め、局地的な前線上で雨雲が発生した。18日21時浜松(防衛省)高度1500m付近では相当温位※351Kの暖かく湿った気塊が流れてきており、これにより中部、西部、東部の山沿いから山地において非常に激しい雨となった。

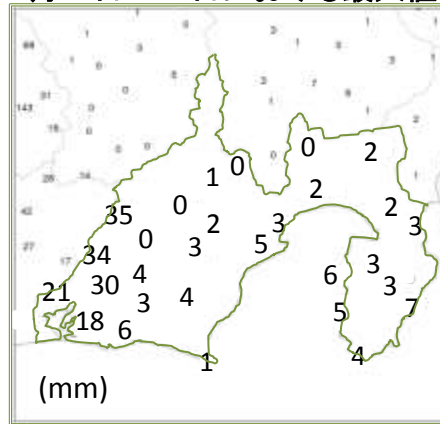
※相当温位: ある高さの空気塊のエネルギーを同じ条件下(1000hPa気圧面)で比較するため換算したもの。暖候期の高度1500m付近の相当温位の目安としては、330Kを越えると短時間強雨の可能性が高まり、340Kを越えると大規模な災害が発生するような大雨に警戒が必要となってくる。単位は絶対温度(K:ケルビン)

4. アメダス雨量分布図

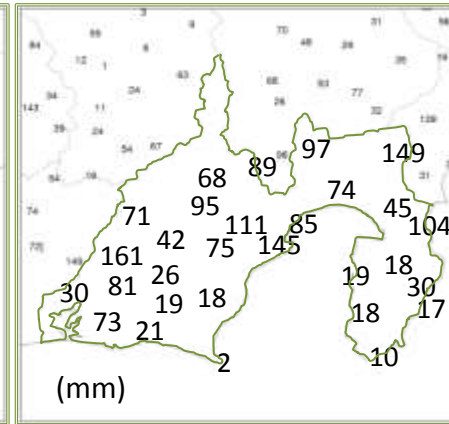


アメダス1時間雨量(正時毎)
7月17日～19日における最大値

アメダス 日雨量
7月18日

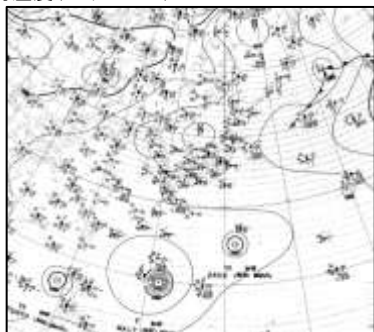


アメダス日雨量
7月19日

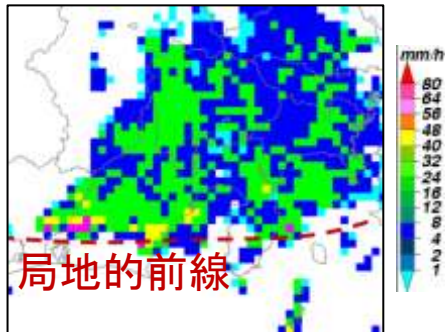


アメダス 3日間雨量
7月17日～19日

5. アメダス雨量時系列変化図 ■ 時間雨量 — 積算雨量



1994年7月18日 21時
地上天気図



1994年7月18日 19時46分
気象レーダー

2. 大雨の原因、特徴

局地的な前線の発生により大雨となる事例は数多くあるが、その発生要因は様々である。本事例の様に、関東甲信方面からの冷氣が影響する場合も多々あり、要因により前線の位置、形状も異なる。台風が遠く離れ、定常的に強い暖湿流が北上してくる場ではなかったことから、短時間で終わった。このように不安定な場では、大雨となる湿った気塊とそれを発達させる要因が揃った地域で局地的に発生するため、刻々と変化する気象状況と県内の降雨特性に注意が必要である。

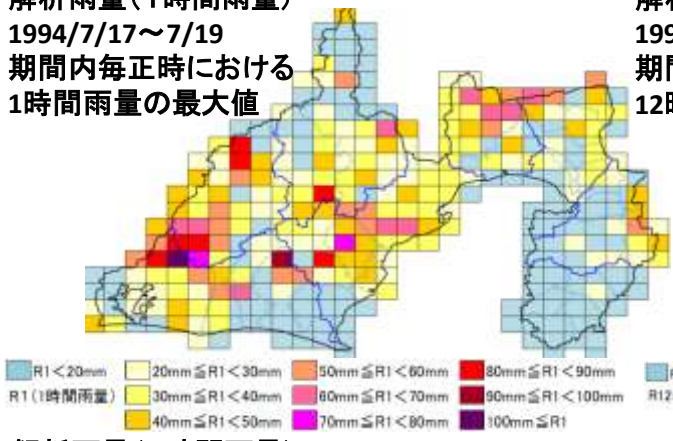
3. 被害概要

	床上 浸水 (棟)	床下 浸水 (棟)	全壊 (棟)	半壊 (棟)	一部 損壊 (棟)	死者 (人)	重傷 者 (人)	軽傷 者 (人)	倒壊 の 数 (カ)	道路 の 閉 鎖 (カ)	橋 の 閉 鎖 (カ)	河川 の 閉 鎖 (カ)	砂防 の 閉 鎖 (カ)	鉄道 の 閉 鎖 (カ)
全県	28	143	0	0	2	0	0	0	0	17	0	35	0	0
中部	28	135	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-
西部	0	8	0	0	2	0	0	0	-	-	-	-	-	-
東部	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-
伊豆	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-

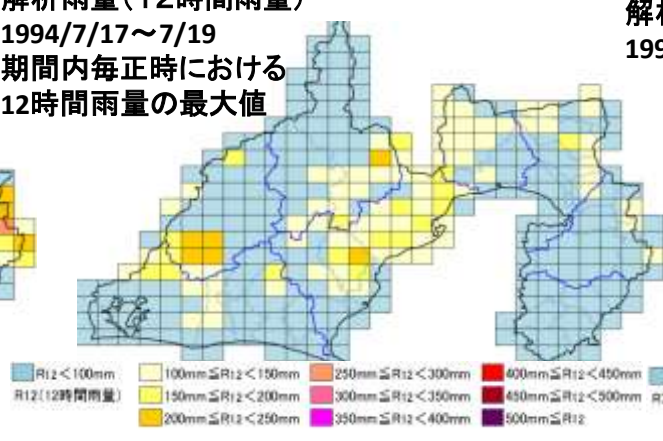
被害数は、静岡県 平成6年における災害の状況による

6. 解析雨量分布図

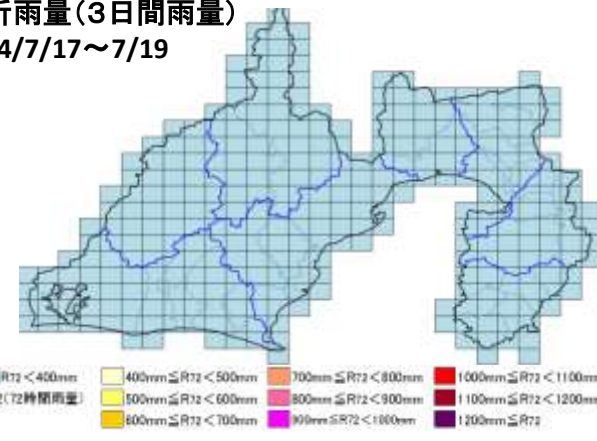
解析雨量(1時間雨量)
1994/7/17~7/19
期間内毎正時における
1時間雨量の最大値



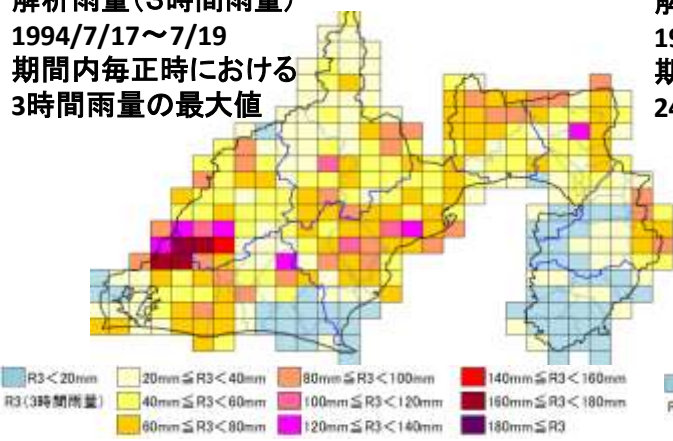
解析雨量(12時間雨量)
1994/7/17~7/19
期間内毎正時における
12時間雨量の最大値



解析雨量(3日間雨量)
1994/7/17~7/19



解析雨量(3時間雨量)
1994/7/17~7/19
期間内毎正時における
3時間雨量の最大値



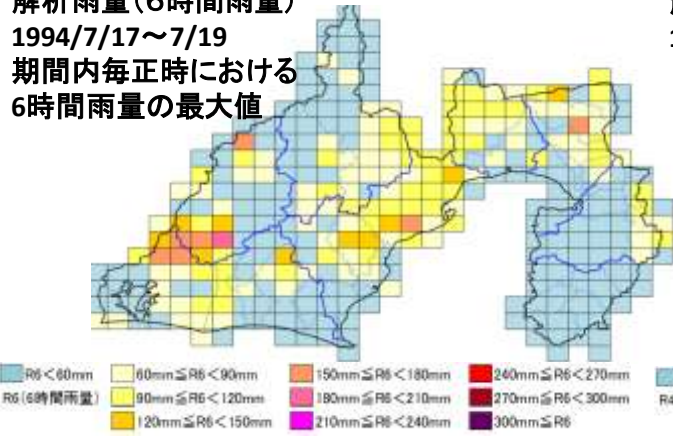
解析雨量(24時間雨量)
1994/7/17~7/19
期間内毎正時における
24時間雨量の最大値



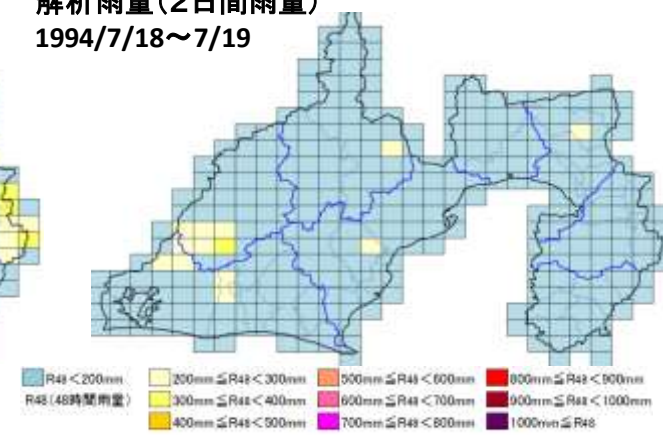
7. 床上、床下浸水被害分布図 (市町毎)



解析雨量(6時間雨量)
1994/7/17~7/19
期間内毎正時における
6時間雨量の最大値



解析雨量(2日間雨量)
1994/7/18~7/19



解析雨量と浸水害分布図からわかる大雨の特徴

局地的な前線が発生した中部、西部の山沿いから山地及び伊豆北で、非常に激しい雨となった。西部では局地的に猛烈な雨となったが、人口密度の少ない山地であったことが幸いした可能性がある。一方平地で非常に激しい雨となった中部では、多数の浸水害が発生したと考えられる。なお、富士山頂付近の強雨は、前線で発生した雨雲が地形効果により再発達したものと考えられる。